

---

デジタルパンク通信 第十三話 2001年4月号

---

Q バーチャルでしょうか、リアリティーでしょうか。

A リアリティーです。

バーチャルはフロンティア。現実とは別の空間。でもそこは現実の代理ではない。現実での仕事を移し替えて置いておく倉庫ではない。現実を超える空間だから面白いんだ。いくつもの人工コミュニティ。数えきれない虚構。

でもなぜか、テクノロジーの人も、ハリウッドの人もゲームの人も、再現が好き。まるで現実であるかのように、が一番のほめ言葉。もっとキレイに、もっとリアルに。白黒がカラーになって、毛穴までクッキリ見えるようになって、つぎはキューティクルまでクリアーに。そうして、現実近づいて、近づいて、リアルになって、リアルになって、で、現実を超えない。

リアリティーは一人ひとりにある。リアルな女優よりアニメの方が興奮するヤツもいる。バーコード読むだけでイッチャウヤツもいる。アーティストにとって大切なのは、そんな一人ひとりの情念にどう触るかだ。魂だ。音楽の人ならすぐわかる話。映像には現実という切り取ってコピーできるモデルがあるが、音楽は純粋な創造だから。音楽って不思議。人類最大の発明。

この10年、デジタルはバーチャル空間を創造してきた。インターネットのコミュニティで、現実と同じようなことができるようになってきた。商売。買い物。鑑賞。観戦。授業。診察。届出。しかしまだ現実に追いついてさえいない。現実を超えるのはとうぶん先。

だがこれからの10年、逆方向の運動も盛んになる。バーチャル空間を現実空間にどう引き戻すかだ。

コンピュータはバラバラになる。あらゆるものに高機能のチップが埋め込まれていく。テレビやケータイの中身はコンピュータ。クルマはコンピュータの指令で動く。冷蔵庫はインターネットで制御される。近頃しゃべるぬいぐるみの体内にあるチップは、月面着陸したアポロが積んでいたコンピュータより高機能。ディスプレイはメガネに埋め込まれ、CPUもメモリも糸となって服に縫い込まれる。

私が身を置く研究所に、いつもウェアラブル・コンピュータを装備して、その上からアルマーニをはおってるおじさんがいる。彼のメガネはPC画面を映し出す。彼の肩に張り付いているチップは彼のサーバだ。見たこと聞いたこと考えたことが肩に溜まり、いつでもメガネに引き出せる。私が彼のウェブサイトを見ているときは、無線でその肩チップにアクセスしているわけだ。いつも現実に生きながら、いつもバーチャルに暮らす。

全てのモノ、あらゆるヒトがデジタルと化し、インターネットでつながっている。それぞれのチップの機能はパソコンより低くても、つながることで、現実空間ぜんたいが、一つの巨大なバーチャル空間となる。コンピュータは姿を隠し、メディアはなくなる。地球は一つのデジタル星になる。

そのとき。いつそうなるのか知らないが、そのとき。そうなっても音楽は、魂を揺さぶっている。